生野義挙史跡めぐり（生野義挙ゆかりの地の紹介）

●山口護国神社

生野義挙で自決した志士たちが祀られています。

文久 3 年（1863）10 月 14 日午後 4 時半ごろ、妙見山の陣から生野の本陣に戻るべく降りてきた南八郎ら志士 13 名は、反旗をひるがえした農民たちと対峙しますが、「もはやこれまで、これ以上、百姓と戦をしても仕方がない」と覚悟を決め、山伏岩の岩陰で自刃しました。

山口護国神社（朝来市山口）

山伏岩（朝来市山口）

「殉節忠士之墓」は、明治元年（1868）2 月、西園寺公望が山陰道鎮撫総督として但馬入りした時に揮毫し建立されたものです。隣に建つ墓誌名の碑は、同じく参謀の折田年秀によるものです。

大正 5 年には、50 年祭を記念し招魂祠碑が建立され、招魂社となり、後に護国神社となりました。

地元では今でも「南八郎さん」と呼ばれ春には慰霊祭が毎年行われ大切に祀られています。

殉節忠士之墓・墓誌名碑
（朝来市山口）

●西念寺

文久 3 年（1863 年）10 月 13 日、生野代官所の本陣を出た南八郎らは午後 2 時に山口村に到着して、西念寺に陣を構え、兵糧、軍器を運搬するため人馬の準備を命じました。

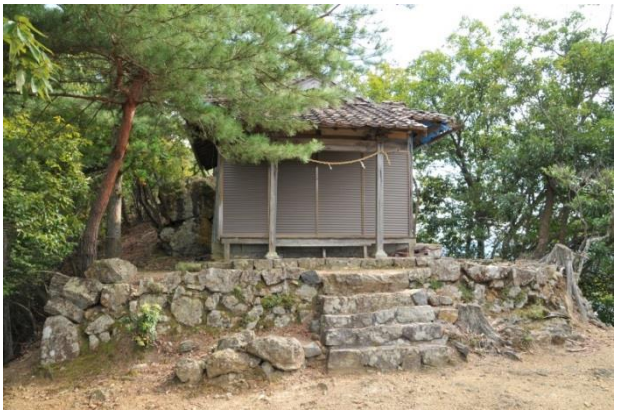
西念寺（朝来市山口）

●妙見堂

岩洲山（妙見堂があることから通称妙見山とも呼ばれる）の中腹に建つ。

南八郎らは、午後 4 時ごろに西念寺を出て、妙見堂に本陣を構え、諸藩の追討に備えたといわれます。

志士達が自刃した後、妙見堂の板塀には、戸原卯橘が書いた辞世が残されていました。



妙見堂（朝来市山口）

●佐中千年家（進藤俊三郎生家）

生野義挙に参加し、武器調達係であった進藤俊三郎の生家。

進藤家は、江戸時代には、代々里正（りせい）を勤め、屋号は佐中の「鉄砲屋」で通っていました。俊三郎は、第 22 代 丈右衛門の六男として生まれ、明治維新後は欧米に留学し、経済学や銀行論を学び、経済界で活躍しました。

佐中千年家（朝来市佐中）

●延応寺

文久3年10月11日午後2時ごろ、沢卿一行は、森垣村の延応寺に到着し、ここから生野代官所に使者を出しました。

生野義挙志士の一人、本多素行と延応寺法印とは懇意であったため、生野に到着した際の一時休息所としました。

延応寺（朝来市生野町口銀谷）

●山田顕義終焉の地

長州出身で、新政府軍の参謀や政府の要職を務めた山田顕義は、療養のため退官し帰郷していましたが、明治 25 年、東京に戻る途中、生野義挙で自刃した又従弟の河上弥市（南八郎）の菩提を弔うため山口を訪れました。

そのあと生野銀山を視察中に倒れ、享年４８歳で亡くなりました。日本大学の創始者でもあり、日本大学設立100周年を記念し、終焉の地である旧生野町に碑が寄附されました。

山田顕義終焉之地碑
（朝来市生野町口銀谷）

●生野義挙趾

昭和15年、皇紀2600年を記念して、生野義挙の事蹟を後世に残すため、代官所跡地の一角に建立されました。

幅2.5m、高さ5m、厚さ0.6mの花崗岩の巨岩で岡山県から運ばれてきました。

生野義挙碑（朝来市生野町口銀谷）

●中島太郎兵衛・黒田與一郎顕彰碑

中島太郎兵衛は、和田山の高田村の大庄屋で、生野挙兵の時は 39 歳でした。弟、黒田興一郎は 30 歳。中島家の旧姓である黒田を名乗っていました。兄弟は、但馬における農兵組立て運動に北垣晋太郎らと共に奔走し、生野義挙破陣後は、木の谷（宍粟市山崎町）で中島太郎兵衛は自刃、黒田興一郎は自ら縛に就き、京都六角獄舎に送られ、獄中で病死しました。

顕彰碑は昭和 15 年に建立されました。

中島太郎兵衛・黒田與市郎顕彰碑
（朝来市和田山町高田）

●大川藤蔵（小河吉三郎）殉難之地

小河吉三郎（水戸藩）は妙見山本陣に向かい、南八郎に本陣解散を伝え、解散の勧告をしましたが聞き入られず、やむなく丹波に落ち延びる途中、農民に後を追われ、山内村のサケジ谷で自刃しました。

大川藤蔵殉難之地碑（朝来市山内）

●小山六郎事績碑

小山六郎は、大月村(朝来市山東町)に生まれ、中島・北垣らとともに農兵組織組み立てに尽力し、義挙では農兵徴募方を務めます。破陣後は長州に逃れ遊撃隊に参加しますが、軍中で失明し、維新後に故郷に帰ります。

明治４年新政府の藩閥的専制などを批判する上表文を残し自決しました。昭和４５年に百回忌を記念して碑が建てられました。

勤王の志士小山喜昌事績碑
（朝来市山東町楽音寺）

●山崎家住宅

山崎甚兵衛は、喜多垣村（朝来市山東町）の土豪で、中島・北垣らとともに農兵組立に尽力し、生野義挙に参加しまた。

庄屋や豪農の呼び掛けに応じて参加した農兵は、総大将の脱出を知ると参加を呼び掛けた庄屋や豪農に対しても矛先を向け、諸村では打ち壊しがおきました。山崎家の母屋には、その時の刀傷が各所に残ります。

山崎家住宅（山東町郷土資料館）
（朝来市山東町喜多垣）

●平野國臣・横田友次郎捕縛の地

生野を脱出した平野國臣、横田友次郎は、城崎に向かう途中、上網場村（養父市）の旅籠京屋で豊岡藩兵に捕縛されました。翌年１月に姫路に護送され、11 日には京の六角獄舎へ移されました。

元治元年（1864）７月 20 日、禁門の変がおこり、その騒動のなかで平野、横田は斬首されました。

平野國臣捕縛地碑（養父市上網場）

●北垣晋太郎（国道）生家跡

北垣晋太郎は能座村(養父市)の庄屋に生まれ、池田草庵に学び、成人して青谿書院の塾頭になりました。農兵組立に尽力し、生野義挙に参加しました。破陣後は、鳥取から長州に逃れ、その後、鳥取藩に任官し、倒幕運動に身を投じました。維新後は、高知県令や徳島県令を兼任し、京都府知事を務めました。生家跡には国指定天然記念物のヒダリマキガヤの木がそびえます。

北垣晋太郎生家跡（養父市能座）

●養父神社

文久３年（1863）９月５日、農兵組立ての第１回会議が養父神社の別当所、普賢寺（現：社務所）で行われました。

養父神社（養父市養父市場）

●青渓書院

青渓書院創設者の池田草庵は但馬聖人と呼ばれ、平野國臣から生野義挙の協力を呼びかけられましたが、時期尚早と挙兵には反対でした。

池田草庵の門下生からは、北垣晋太郎、進藤俊三郎、西村哲二郎が生野義挙に参加しました。

青渓書院（養父市八鹿町宿南）

●多田弥太郎終焉の地

多田弥太郎は、生野本陣を脱出し大坂に逃れました。しばらく京都、大坂に潜伏していましたが、文久４年（1864）２月に因州に行くこととなり、途中、城崎の旅籠三木屋に立寄ったところを出石藩に捉えられました。出石に護送される途中、浅間峠（養父市）にさしかかったところで、護送する藩士に、いきなり抜刀され、駕篭の中の多田は刺殺されました。

多田弥太郎顕彰之碑
（豊岡市出石町）

●中條右京・長曽我部太七郎の終焉の地

山口村妙見山で南八郎らと行動を共にしていた中條右京と長曽我部太七郎は、伊藤龍太郎の説得に応じ、妙見山の陣から下山し、生野から脱出することにしました。

二人は生野峠を越えて、播磨街道を南下する途中猪篠村（神河町）まで来たとき、後をつけてきた百姓たちの放った銃弾に倒れました。

中條右京・長曽我部太七郎の墓
（神崎郡神河町猪篠）

●美玉三平・中島太郎兵衛終焉の地

生野から逃れた美玉三平と中島太郎兵衛、黒田興一郎兄弟は木の谷（宍粟市山崎町）で押寄せてきた農民に追い詰められ、美玉三平は猟師の放った銃弾に倒れ、中島太郎兵衛は自刃、黒田興一郎は兄を介錯した後、自ら縛に就きました。興一郎は京都六角獄舎に送られ、獄中で病死しました。

美玉・中島両氏之墓
（宍粟市山崎町木ノ谷）